

学位論文の要約

本研究は、制度ロジックおよび制度ロジック多元性概念を用いて、組織のイノベーションマネジメントについて検討した研究である。本研究の問いは、主に以下の2つである。まず、制度ロジック多元性下において、組織の意図的な対応は、制度とどのように影響し合うのかという点である。次に、同じく制度ロジック多元性下において、組織は制度ロジックを両立するためにどのように対応するのかという点である。

本研究がより細かな分析対象としたのは、オープンイノベーションプロジェクト、複数の産学連携プロジェクト、サービス企業におけるイノベーションを推進する部門の導入、という事例群である。いずれもイノベーションを企図する組織を題材としている点、事業ロジックを含む制度ロジック多元性を題材としている点で、本研究の研究課題に合致した対象である。

本研究では、主にグラウンデッドセオリーアプローチに基づいて、研究課題の解明を試みた。データは、インタビューデータと参与観察を基にしたフィールドノートを中心としている。分析においてはデータのトライアングレーションを行うため、それぞれの事例における社内資料や、公的なプレスリリースなども補完的にデータソースとして用いた。

定性分析の結果として、本研究は主に以下のことについて明らかにした。

まず、オープンイノベーションに伴う区分化戦略において、多元な制度ロジックは根源的に混淆している可能性があるにも関わらず、純度の高い制度ロジック同士を分け隔てようとする「区分化戦略」を行うと、区分化戦略を採った主体は「析出」現象を意図せざるコンフリクトであると判断し、結果としてマイナーな制度ロジックが排除させる。またその結果として多元性が削減されるため、イノベーションの達成が阻害されるという結果を招く。

また、産学連携プロジェクトを題材として、科学と事業の関係のなかで生じる「科学知識の事業活用における不確実性」において、組織の依拠する制度ロジックが異なることに起因する組織の戦略の差異によってコンフリクトが生じることを明らかにした。そのコンフリクトに対応し多元な制度ロジックを両立させるため、科学ロジックとも事業ロジックとも異なる「第3のロジック」の「道具的活用」が行われるが、道具的に用いられる制度ロジックは、各々がドミナントとする制度ロジックや、組織が埋め込まれた制度環境の影響を強く受ける。

以上のような第3のロジックを用いる「イノベーションにおける迂回戦略」は、多様な対象に向けた正統化においても有効であることを、サービス企業における新部門の導入事例をもとに明らかにした。また迂回戦略においては、制度的合理性を求めることで、非合理性の受容や理由の自走を避け得ると考えられる。

本研究の貢献は以下のものである。まず、制度ロジック研究への理論的貢献である。本研究は、「科学ロジック」と「事業ロジック」を題材として、既存理論において乏しいとさ

れてきた制度あるいは制度ロジック同士の関係を分析するという観点から制度ロジック多元性を考察したものであり、制度ロジック研究の発展に寄与している。

さらに、制度ロジック多元性下における組織の対応を検討するうえで、制度ロジックの両立を前提とした議論を展開した点も貢献が高い。特に組織のイノベーションマネジメントにおいては、制度ロジック多元性を維持・両立させるという観点が非常に重要である。そのうえで本研究は、組織が自身の最もドミナントとする制度ロジックを離れ、「第3のロジック」を用いて制度ロジックの両立とコンフリクトの解消を図るという戦略パターン、および、イノベーションの正統化に際して多様な理由の自走を避けつつも、段階的に正統化を行う「イノベーションの迂回戦略」を提示した。これは、制度ロジック研究において新規性の高い主張である。

次に本研究は、既存理論において議論の中心のひとつであった意図的戦略の可能性についても検討した点で貢献がある。組織は制度ロジックを道具的に活用することで、制度ロジックの両立やコンフリクトの削減を図ると同時に、自身が埋め込まれた制度環境の影響を強く受けるものであり、また、制度および制度ロジックの性質について知悉していないと、戦略の失敗の可能性を常にはらむことを示した点に貢献がある。

次に、本研究の実務的貢献について述べる。まず、イノベーションマネジメントにおける貢献である。オープンイノベーションや産学連携といったイノベーション形態は近年ますます増加傾向にあり、実務的重要度が増している。本研究は、イノベーションマネジメントにおける区分化戦略の陥穽、および科学と事業を両立させるための戦略パターンを提示しており、実務的に「科学と事業をどう両立させるか」という問題に対して有用な視点を提供できていると考える。